

史跡館城跡金属探査報告

あっさぶ文化遺産調査プロジェクト 石井淳平

2021 年 12 月 4 日

概要

本調査は、史跡館城跡における礎石建物の配置区域において実施した金属探査である。当該区域は藩主居室部分を含む館城の中核的な建物群と推測され、過年度の調査では釘や鋳等の金属製品が出土している。

金属反応の分布は礎石建物の領域とよく一致し、藩主家族に仕える女性の活動空間周辺と藩主居室周辺、中～上級藩士らの日中の活動空間など、特定の空間に金属反応分布の集中が見られた。館城の主要建築物ともいえる奥御殿及び常御殿において優先的に建築・整備された空間領域が、金属反応の分布によって示唆されるものと結論づけた。

1 調査の概要

1.1 概要

期 間 2021 年 8 月 10 日～8 月 14 日、9 月 18 日～9 月 19 日

参加者 石井淳平、石井遼平（8 月 10～11 日）、石井布由子（9 月 19 日）

1.2 経緯

館城跡は史跡指定以前の昭和 39 年から延べ 12 次にわたる発掘調査が実施されてきた（大場 1969; 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989; 厚沢部町教育委員会 1991, 2007, 2008, 2009, 2010, 2010, 2011, 2012, 2013）。平成 21 年に地表面確認による礎石の地点計測が行われ、3 棟の礎石建物が検出された（厚沢部町教育委員会 2010）。

これらの調査成果を踏まえ、礎石建物が所在する区域の金属製遺物分布状況の把握を目的として、本探査を実施した。

2 史跡館城跡の位置と沿革

2.1 位置

館城は北海道南西部厚沢部町字城丘に所在する（図 1）。厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約 1km に位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約 50m で、糠野川に面した平坦面からの比高差

は約 20m である。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約 30m の小丘陵である。

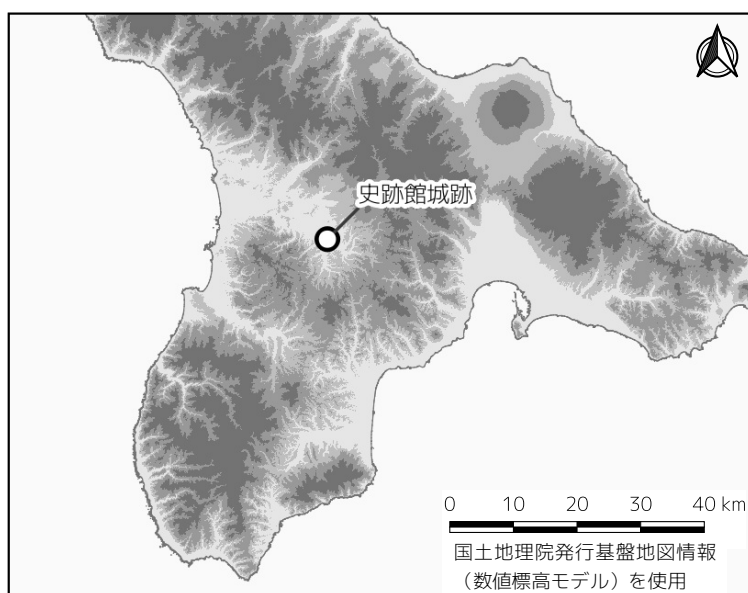


図 1 史跡館城跡の位置

2.2 沿革

館城は明治元年 9 月上旬に松前藩によって築城が開始された（江差町史編集室 1981）。築城工事は 10 月下旬頃に一時中断し、翌年の雪解けを待って再開する見通しだったと考えられる。

しかし、同年 11 月 15 日に旧幕府軍一聯隊を率いる松岡四郎次郎の攻撃を受け館城は落城し（松前町史編集室 1974: 326）、以後再建されることなく現在に至る。明治 21 年に館村鷺の巣（現厚沢部町字富里）に入植した二木小児郎は、明治 21 年の館城の様子として、門柱の焼け跡や礎石が散乱する様子を書き残している（二木 1937: 45-46）。昭和初年頃に一部が農地化されたことを除いて開発行為が行われるず、今回調査を行った範囲についても礎石が良好に残存する。

3 調査の方法

金属探査に使用した機材はホビー用の金属探知機（商品名「GC-1072 Metal Detector」）である。事前のテストでは、ミニエー銃弾、硬貨（1 円、10 円、100 円）には距離 10cm 以内で的確に反応することを確認した。

国土座標（世界測地系平面直角座標系 11 系）に準拠し¹⁾、探査範囲の南北方向に測線を設定した。測線に沿って金属探知機を移動しながら反応地点を検出した。複数回の走査で再現性のある反応を示す地点を反応地点として記録した。

1) 本調査で使用した測線は、白杵勲氏（札幌学院大学人文学部）が 2021 年 8 月 11 日から 12 日にかけて実施したレーダー探査等の測線を利用させていただいた。



図2 金属探査実施状況

4 探査範囲

探査実施区域は、礎石建物が検出されている領域である（図3）。これらの礎石は、藩主の居所である奥御殿及び日中の居所である常御殿に相当する建物を構成すると考えられる。平成21年の調査ではこの区域から陶磁器のほか、釘や鋸などの建築資材、屏風の縁金具などが出土した（厚沢部町教育委員会 2010: 45-50）。

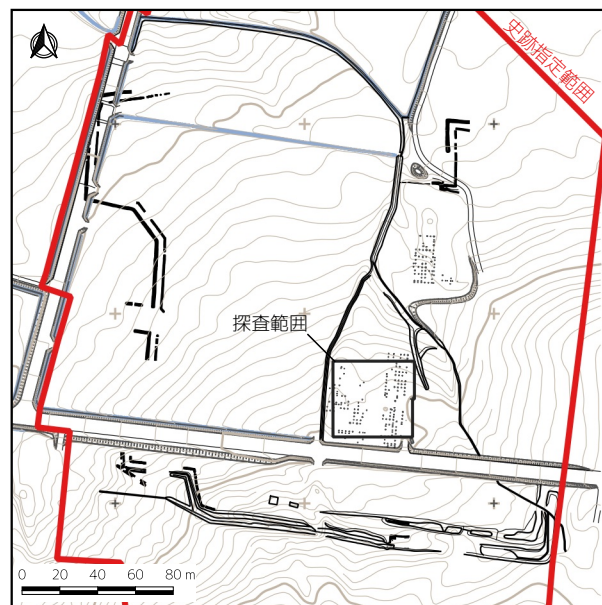


図3 金属探査の範囲

5 探査の結果

5.1 金属反応の分布

調査区の北東部、南東部、南西部の3箇所に金属反応の集中域が確認できる²⁾ (図4)。調査区には礎石の配置から2棟の建物が存在すると推定されており(厚沢部町教育委員会 2010: 69)、2つの建物に挟まれた $x=7730 \sim 7740$ の領域は分布密度が低い。東側建物の南北に高密度の反応分布がある。平成21年度の礎石調査における出土遺物分布も東側建物に多く見られることから、過去の調査結果とも整合する反応分布である。



図4 金属反応とカーネル密度推定による等密度線

2) 金属反応のカーネル密度推定には GRASS GIS version 7.8.2 の `v.kernel` コマンドを使用した。radius=7m である。作成した密度ラスタから `r.contour` コマンドにより、0.2 ステップの等密度線を生成した。

5.2 金属反応のポイントパターン解析

金属反応の分布は図4のとおり明らかな集積傾向を示す。

ポイントの集積が偶然に生じるパターンではなく、分布が何らかの構造を反映し、関連をもつことを表現するのに利用されるのがK関数である。K関数により算出されるK統計量は、任意の金属反応の周辺に完全空間乱数（complete spatial randomness）と呼ばれる状況を生じ、当該完全空間乱数を生成する半径における理論的なK統計量と実測されるK統計量の差を比較し、実測値 > 理論値 ならば、その半径距離内では、偶然とはみなせないポイントの集積が生じている可能性が高いと判断する。逆に 実測値 < 理論値 ならば、ポイントは他のポイントを避けるように分布する可能性が高いと判断する。完全空間乱数を発生させる半径を徐々に増加させることで、領域の面積に応じた空間集積の状況を明らかにすることができる。

図5のエンベローププロットは、金属反応分布における1000回のシミュレーションの上限値、下限値及び理論値と実測値を比較したものである³⁾。半径約1.5m以上で、実測値 > 理論値 となっており、明確な空間集積が認められる。すなわち、何らかの要因（たとえば過去に存在した建築物）によって、偶然とは言えない金属反応の集中区域が存在することを示す。半径が10mを超えると分散傾向に転じ、半径約13m以上で 実測値 < 理論値 となり、空間的な分散傾向を示す。金属反応の分布が排他的であり、他の金属反応から離れて分布する傾向があることを意味する。すなわち、金属反応の分布が複数の集積からなることを裏付けるものといえる。

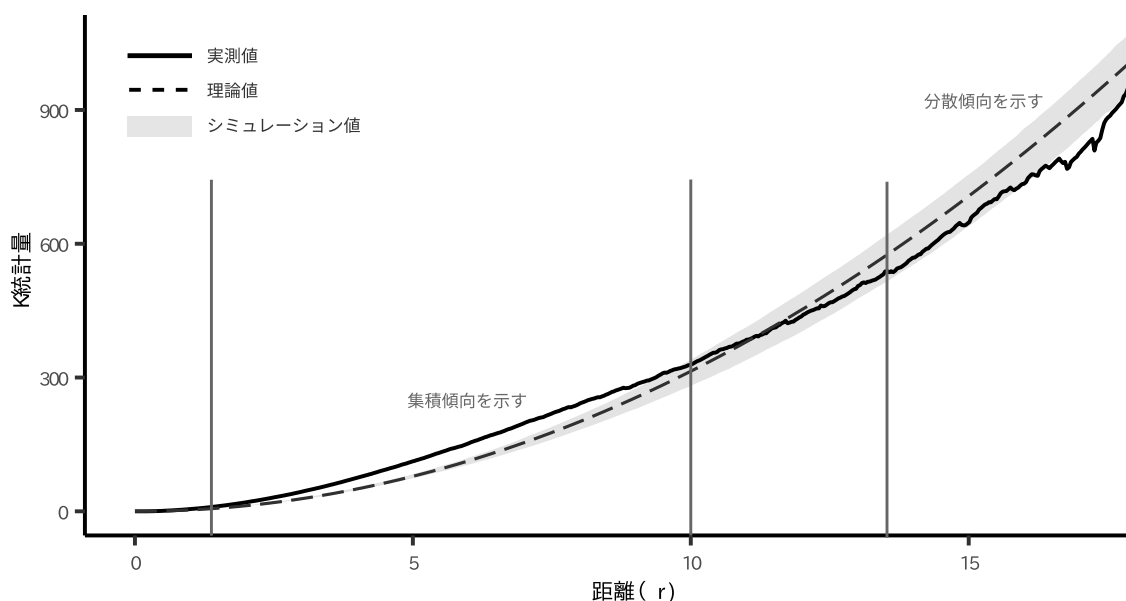


図5 金属反応分布のエンベローププロット

3) ポイントパターン解析にはオープンソースの統計解析環境 R version 4.1.1 を使用した。K 統計量の算出及びシミュレーションは、R の空間解析パッケージである spatstat version 2.2 を使用した。エンベローププロットの作成は ggplot2 version 3.3.5 を使用した。

5.3 金属反応と建物

金属反応の集積は探査範囲北東部と南西部、南東部にみられる。北東部の集積は、『館築城圖』⁴⁾における「御末女中部屋」、「御乳御抱部屋」、「御次」など、藩主家族に仕える女性たちの空間に相当する。南東部の集積は「御寝所御居間」、「御仏間」、「内縁」など藩主の日常生活空間に相当する(図6)。同様に南西部の集積は「御近習頭」、「下御台子間」、「奥御納戸」など、中〜上級藩士らが日中所在する空間に相当する。

金属反応の実態は、釘・鋸などの建築資材、什器類に付属する金具、刀子などの道具類と考えられる。その疎密は建物の完成度及び内部空間の整備度合いを反映するものと考えられる。

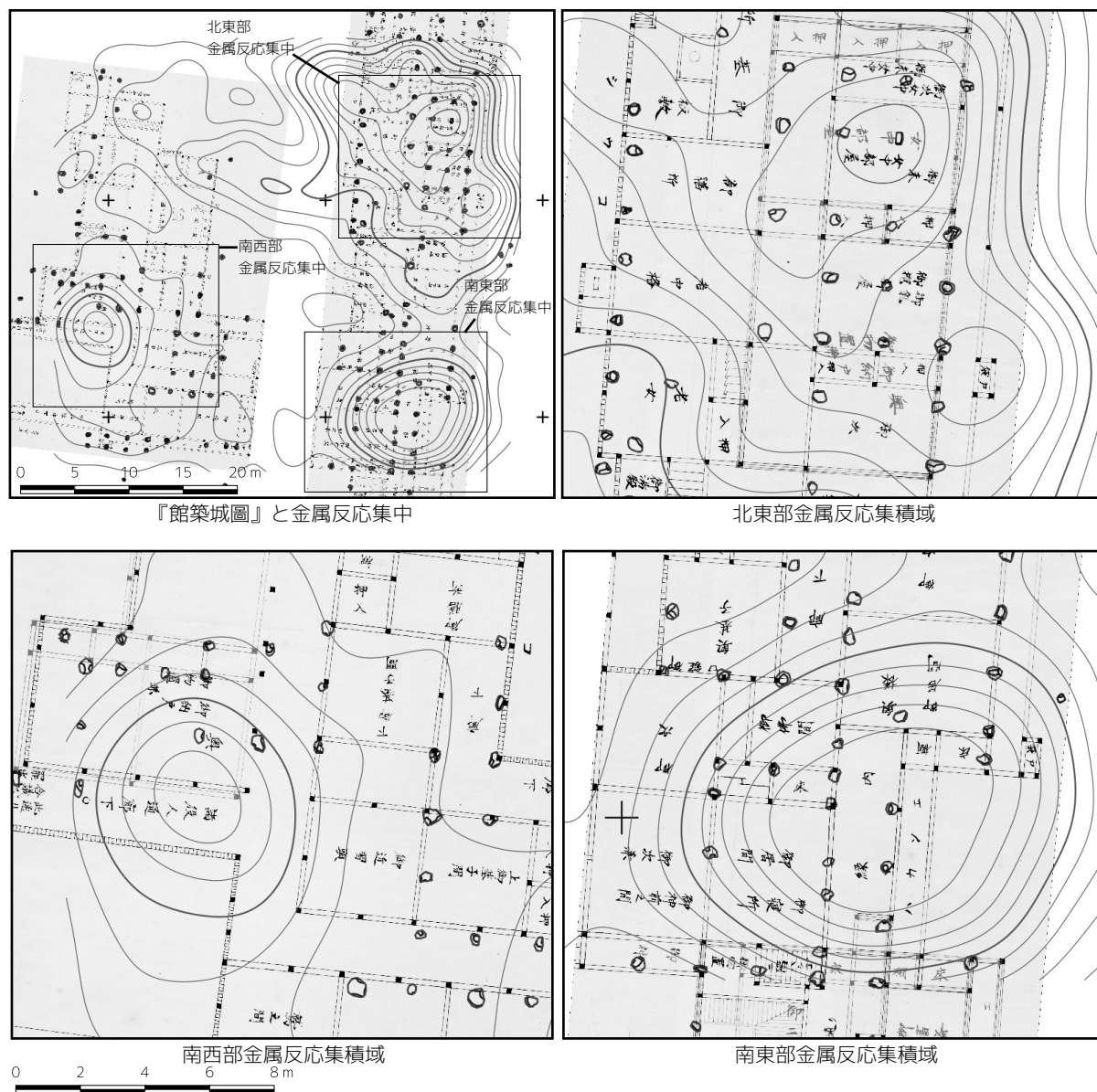


図6 金属反応分布と『館築城圖』

4) 『館築城図』は江差の豪商増田家に残された文書類(増田家文書)に含まれる館城の奥御殿及び常御殿を描いたと思われる平面図である。2021年現在、原本は確認できず、厚沢部町郷土資料館所蔵の写本を使用した。描かれた平面図は、現地の礎石配置とは部分的によく一致するが、図面全体として現地の礎石配置とは一致しない。

6 まとめ

本探査で検出した金属反応は以下の3種が混在するものと考えられる。

1. 金属探知機の誤反応
2. 館城落城後に持ち込まれた近代の金属遺物
3. 館城に伴う金属遺物

これらのうち、1. の誤反応については、反応地点の記録に際して反応の再現性を要件としたことから、その大半を除去できたものと考えている。2. の近代の残存金属については、観光客の投棄物や毎年行われる「館城跡祭」の特設舞台設置等に伴う残置金物などが考えられる。しかし、探査区域は直近30年間において年4～5回の草刈りを実施しており、その障害となる金属片については随時史跡外に排出されている。すなわち、2. の影響についても限定的と考えられる。以上のことから、本探査において検出された金属反応の多くは3. 館城築城に伴う遺物と判断する。

金属反応の集積は礎石建物の領域と合致し、館城築城時に持ち込まれた金属の集積実態を反映しているものと考えられる。藩主家族に仕える女性の活動空間周辺と藩主居室周辺、中～上級藩士らの日中の所在空間に高い集積がみられることは、これらの領域が館城築城において優先的に仕上げられ、什器類の搬入が行われたことを反映する可能性が高い。結論は今後の発掘調査の成果を待たねばならないが、本探査は館城の主要建築物である奥御殿及び常御殿において優先的に建築・整備された空間領域の存在を示唆するものと言えよう。

引用・参考文献

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城址 遺構確認調査報告書』
- 厚沢部町教育委員会 1991『館城址遺構・範囲確認調査-第2・3次調査報告書-』
- 厚沢部町教育委員会 2007『館城跡Ⅲ 平成17・18年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書5）
- 厚沢部町教育委員会 2008『館城跡Ⅳ 平成19年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書6）
- 厚沢部町教育委員会 2009『館城跡Ⅴ 平成20年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書7）
- 厚沢部町教育委員会 2010『館城跡Ⅵ 平成21年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書8）
- 厚沢部町教育委員会 2011『館城跡Ⅶ 平成22年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書9）
- 厚沢部町教育委員会 2012『館城跡Ⅷ 平成23年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書10）
- 厚沢部町教育委員会 2013『館城跡Ⅸ 平成24年度町内遺跡発掘事業に伴う発掘調査報告書』（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書11）
- 江差町史編集室 1981『江差町史』4 資料4（関川家文書） 江差町 1220-1301
- 大場利夫 1969「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報』17（昭和39年度） 174
- 二木小児郎 1937『福寿草 二木小児郎自叙伝』 厚沢部町教育研究会社会科サークル 2003 復刻版参照
- 松前町市編集室 1974「戦争御届出書」『松前町史（史料編）』第1巻 松前町 317-343